

性格の一貫性と相互作用論～新しい性格観の確立¹⁾

渡邊 芳之
帯広畜産大学畜産学部

A New Perspective on Personality : The Consistency-Debate and Interactionism

Yoshiyuki WATANABE
Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine

Essential issues of the consistency-debate of personality and new perspectives of personality psychology were reviewed. Classical personality theories regarded personality as an independent effective factor interacting with situation and assumed that personality has a consistent effect on human behavior, independent from situation. These assumptions, however, have been criticized severely in the debate, and a new perspective emerged as interactionism, that takes personality itself as a consequence of person-situation interaction. Further implications of interactionism on future personality psychology were discussed.

Key words : personality, consistency, interactionism

1. 古典的性格観と性格の一貫性

われわれは個人の行動に個性的で持続的な規則性やパターンを見出すと、それを性格の概念に抽象化する。このとき、性格概念が意味するものは観察そのものであり、概念自体は行動パターンの原因や構造に関する情報は含まない。しかし、われわれは多くの場合、そうした性格概念が行動に現れる個人差を生み出している内的実体のようなものと深く関係していると考えられる。心理学における古典的な性格観も、行動に現れる個性的パターンは

内的な実体の働きが現れ、観察された行動パターンはそうした「性格そのもの」と直接的に結びついていると考えてきた。したがって、観察される行動パターンを類型や特性などの枠組みで分類・理解できるならば、それはそのまま内的な性格を分類・理解できたものとする。類型論や特性論が「行動の理解」に留まらず「性格の理論」と呼ばれるのはそのためである。

こうした考え方から必然的に導かれるのが一貫性の仮定である。古典的な性格観では、人の内部にある性格が行動の個性的なパター

1) 本稿は日本行動科学学会第6回大会(1998年10月7日、於府中市安田生命アカデミア)でのシンポジウム「性格心理学再考」(企画者:投石保広・岸本陽一、実行委員長:杉山尚子)において発表したものをまとめたものである。

ンとして現れると考えられるから、性格はその場の環境や状況からは独立に行動に影響を与えることになる。したがって、性格が生み出している一定の行動パターンは状況がさまざまに変化してもある程度持続することが期待される。

もちろん状況によって性格の影響力は変化するが、性格と性格関連行動との関係そのものは状況を越えて持続すると考えられる。これが性格の一貫性(通状況的一貫性)である。こうした一貫性の仮定は、従来の性格心理学の根幹をなすものであり、類型や特性の分析に意義があるのは、それが性格の構造を明らかにし、人の行動の状況を越えた説明や予測に役立つと考えられているからである。また、性格テストが役に立つのは、それが状況を越えて人の行動に影響する性格を捉えており、その結果からその人の行動を説明・予測できると考えているからだ。

もちろん、こうした考え方が状況の影響力や、人と状況との相互作用を否定するわけではないが、相互作用の「人」側の要因を代表するのが「性格(パーソナリティ)」であることが重要だ。こうした考え方は有名なレヴィンの公式「 $B=f(P, E)$ 」の古典的な理解といえる。人と状況とが相互作用するときの人の側の重要な要因が、内的で状況とは独立した(一貫性を持った)性格である、という考え方である。

2. 一貫性論争

さて、一貫性論争ではこうした古典的性格観のどこが問題にされたのだろうか。論争に火をつけた Mischel (1968) が最初に指摘したのは、性格アセスメントの予測力の低さであり、その原因として彼は「性格関連行動の通状況的一貫性の低さ」という事実をあげた。一般に性格と関連すると思われるような人間行動が、状況によって大きく変化して一

貫性を示さないという報告は古くからあったが、多くの場合そうした状況の影響による変動は誤差と考えられてきた。Mischel (1968) は関連する多くの先行研究を調べ、人間行動の通状況的一貫性は非常に低く、性格を指標にして予測することには意味がない、と主張した。

Mischel はそれにとどまらず、性格概念の科学概念としての有効性そのものに対しても疑問を投げかけ、性格概念は観察を抽象しているだけで、内的実体の指標ではなく、それによる行動の説明は循環論になること、そして、行動に現れる性格は状況の影響を大きく受けるということ論じた。そして、社会的学習理論に基づいて性格心理学を再構成すべきだと主張した。この主張は性格心理学全体の前提に関わる問題だったので、大きな論争になった。これが一貫性論争である(渡邊・佐藤, 1994b)。

一貫性論争を通じて、伝統的性格心理学者たちは一貫性の証拠を見出そうとしたが、良い結果は得られなかった。それらは、別の個人差や状況的変数などなんらかの変数を新たに方程式に加えるとか、行動を長期間蓄積して状況の影響をむりやり排除していくとかして、ごく限定的な一貫性を見出したに過ぎない(Krahé, 1992)。いずれにせよ、性格関連行動の一貫性や性格概念の予測力は相当に限定して考えられるようになったし、性格概念が持つ行動予測力は状況を考慮しなければ保証されないことも明らかになった。このことは、古典的な性格観自体の見直しを求めるものでもあった。

3. 新しい性格観～相互作用論の考え方

そこで現れてきたのが「相互作用論」といわれる考え方である(Endler & Magnusson, 1976; Krahé, 1992)。相互作用論の大きな特徴は、内的な実体を仮定することなく、行動

に現れる個性的なパターン自体を「性格」と考えること、そして、そうした行動のパターンは内的な実体の現れではなく、生体としての人とその人を取り巻く環境や状況とが複雑に相互作用した「結果」として考えることである。

ここでは、直接観察できる行動の個性的パターンを内的性格と同一視するのではなく、そのパターン自体を性格と呼ぶとともに、それはあくまでも相互作用の結果として生じたものであると考える。したがって、性格は人の内的要因だけでなく状況の力も強く受けて成立するから、通状況的一貫性は仮定できないし、する必要もない。性格の変動は人の内的要因が違って生じるし、状況の違いによっても生じる。また、ある人の行動に何らかの一貫性が見られるとしても、それはその人の内的要因と状況との相互作用の結果であって、通状況的一貫性であるとは限らない。したがって、結果の観察を性格概念として人の中の実体に投影し、行動を説明・予測することは無意味である。ここから、これまでの類型、特性などの「性格理論」は、単に結果として生じる性格を分類するための枠組みに過ぎなかったことがわかる。これは素朴な性格観も同様であり、性格概念から行動を説明することは結果を原因と混同している。

この「相互作用論」と古典的相互作用モデルとの最大の違いは「人の内的要因」の性質である。古典的モデルでは、観察から抽象された「性格」がそのまま内的要因と対応させられていたが、相互作用論のモデルではそれは「結果」として切り離される。性格と状況の相互作用が行動を決めるのではなく、人と状況との相互作用が性格自体を決めるのである。

もちろん、なにを内的要因と考えるかは厳密になり、真に人の側の要因で、状況とは独立に行動パターンに影響を与えるものだけが内的要因とされる。まず考えられるのは遺伝

的要因、生理的要因などの身体的システム、脳や神経系などの情報処理系に関わる個人差変数などである。これらが状況から独立に一貫性を持って働くことは確かであろう。といっても遺伝が性格を決めるということではなく、遺伝は状況と相互作用して性格を決める重要な要因である、ということであり、実際の行動に現れるものを説明・予測するには状況を考慮しないわけにはいかない。

また、心理学者がいう「認知的要因」の多くは、実際には観察を抽象しただけのもので、性格と同じく相互作用の結果に過ぎず、そのまま内的要因と考えることはできない（欲求や感情などの心的概念も同様）。ただし、この点では研究者によって考え方の違いがある。過去の状況に還元できるような要因、つまり「経験」とか「知識」とかいったものを人側におくのかどうかにも議論があるだろう。

いずれにせよ、性格を内的要因としてではなく、人と状況との相互作用というシステムの中に含めて考えることで、性格に対する視点は大きく広がる。また、性格は短期的には相互作用の結果だが、結果としての性格が今度は周囲の環境や人の内的要因に影響を与え、というフィードバック、それによる新しい性格の生成という連鎖を考えていくこともできる。同時に、これまでの性格心理学が苦手としてきた性格の変容の問題も、状況との相互作用をきちんと考えることで上手に扱えるようになる（渡邊・佐藤，1997）。相互作用論の枠組みの上で、性格心理学の新たな前進が可能になるのだ。

4. 素朴な概念はなぜ有効だったのか

では、従来の性格観が性格の本質をうまく捉えていないなら、どうしてそれがもっと早く放棄されずに、今まで日常の行動説明や、心理学的な説明に用いられてきたのだろう

か。実際、性格概念は日常的な行動の説明や予測において役に立っただけでなく、ときには心理学的にも有効だったのだ。

その理由は、日常的な行動説明や予測、そして心理学的な説明や予測が行われる場面が、状況的にかなり限定されていたからである。われわれが自分の周囲の人たちの行動を観察する場面や、そうした行動の原因を説明・予測することが必要となる場面は、自分がその人と社会的相互作用を持つ、ごく限られた場面だけである。そこでは、状況が限定されているだけでなく、観察者としての自分と観察対象となる相手との相互作用も、重要な状況要因として相手の行動を限定する。したがって、相手の行動は表面上強い一貫性を持つから、それから抽象した概念は相手の行動に対して高い説明力・予測力をもつのである。

たとえば職場で真面目な性格を示している人には、大事な仕事を任せても実際にちゃんとやってくれるだろうし、不真面目な人は仕事を手抜きするだろう。つまり、表面上、性格から行動が予測できているのだ。もちろん、職場以外の状況でそうした予測が有効になるかは実際には状況に依存する。ところが、普通は同僚の職場以外での行動を見るチャンスは少ないし、まして説明や予測など求められることはないから、性格からの行動予測が状況の関数であることは気づかれない(渡邊・佐藤, 1994a)。

心理学的な性格測定や予測も、こうした状況の限定性によって有効になる。実際のテスト利用では、説明や予測が必要とされる状況や場面、あるいは時間と比較的密着したところでテストが実施され、説明や予測が行われていることが多い。こうした状況要因の限定が、これまでの性格概念に見かけ上の説明力・予測力を与えていたのだ。それを状況の限定を越えた説明や予測に用いようとしたときに初めて、性格概念が役に立たないというこ

と、つまり一貫性問題が生じる。

このことは、ここで述べているいろいろな問題が、性格概念自体の問題というよりも、性格概念とそれを用いる心理学との間の「ずれ」の問題だということを示している。そもそも日常概念としての性格概念は、比較的狭い人間関係の中で社会的相互作用を重ねている人々がお互いの行動を説明したり、予測したりする中で生まれてきたのではないか。同僚の中に明るい人も、暗い人もいる、それは実際にはその場の様々な状況、人間関係との関わり合いの中でそうなっているわけだが、そうした状況や社会的相互作用が維持されている限りは一貫性を持って示されるし、それをその人の内部に投影して実体のように考え、行動の説明や予測に用いることは、科学的には間違っているが、有効なのだ(渡邊, 1997)。

このように、われわれが人の行動を理解するために用いている枠組みの中には、科学的に正しいかどうかは疑問だが、ある一定の条件下では実際に有効であるものがたくさんある。われわれが日常生活を送る上ではそれらを知っていた方がよいし、知っているのが普通である。最近ではそういった枠組みを「心の理論」と呼んで、その成立過程や対人関係の諸問題などとの関係がさかんに研究されている。

そういった意味で、古典的な性格観に基づいた行動の説明や予測の枠組みは一種の「心の理論」であった、と考えた方がよい。そして、類型論や特性論などの古典的性格理論は、われわれが性格について共有している心の理論がどのようなものであるのかを示していたのだ。問題は、心理学が長い間、そうした心の理論を科学的理論と混同し、心の理論の有効性が必然的に持っているさまざまな限定をとりはらって科学的説明に用いようとした点にあるだろう(渡邊, 1997)。

5. これからの性格心理学

つぎに性格心理学の今後について考えてみたい。新しい性格心理学の研究課題は、まず第1に、性格を生み出す相互作用の精密な分析である。本当に内的要因として扱えるものをどのように特定し把握するか、それらと状況とが相互作用して性格が生み出される過程をいかに精密に捉えるか、ということである。相互作用論が理念として正しいことは有力だが、それが具体的にどう研究に生かされるかは、まだこれからの課題である。そして、ここに行動主義的なパラダイムの導入が求められる。生体と状況との相互作用を、要素論に陥らずに生き生きと把握するパラダイムとして、条件づけによる学習や行動分析の視点はおそらく非常に有効である。また、観察結果の内部への投影と原因化といったメンタリズムの批判的検討は、行動分析が得意とする領域だろう。

第2に、性格検査や性格測定の利用法を改善することがある。テスト結果が性格の実体を測っており状況を越えて予測に役立つというパラダイムはもはや無効だが、テストの有効性が否定されたわけではない。少なくとも、テストが一定の客観的方法で性格を測定できていることは間違いなく、ある状況での性格が正確に測れているなら、状況との関係をうまく統制すれば行動の予測には利用可能である。そこで、より高い予測力を得られる場面と用法を工学的に追求していくことは可能だろう。それには行動パターンとしての(相互作用の結果としての)性格を捉える方法の一段の洗練と、状況を適切にとらえるツールの開発が必要である。

最後に、「心の理論」としての性格概念の研究がある。先にも述べたように、性格概念はもともと濃密な人間関係の中で有効な行動説明と予測の道具として生じたと考え、それらと社会的相互作用との関係や、対人関

係の中での効用が問題になる。実際の対人関係の中で性格概念がどのように用いられ、対人関係の進展や変化とそうした概念の用法や適用範囲とにどのような関係があるかについての研究が待たれる。また、こうした心の理論は文化などのマクロな環境・状況とも深く関連するだろう。その点でビッグファイブの要素が文化によって違うというような話は非常に興味深いし、これまで提唱された類型論や特性論など、さまざまな性格理論を、その時代や社会の環境が反映された心の理論の集大成として分析し直すこともできる。いわば「性格の社会的構成」に関する研究である。

相互作用論に基づく新しい性格観は、性格という現象自体をとらえる新しい枠組みとして、これまでになかった研究を生み出す力を持つだけでなく、古典的な性格観や古い性格研究を新しく位置づけ、分析していく道も示している。研究されるべきテーマは多数あり、今後より多くの心理学者、とくに行動科学、行動の分析に精通した研究者がこの領域に参入してくることが期待される。

参考文献

- Endler, N. S. and Magnusson, D. (1976) Toward an interactional psychology of personality. *Psychological Bulletin*, **83**: 956-974.
- Krahe, B (1992) *Personality and Social Psychology: Towards a synthesis*. London, Sage Pub.
- 堀毛一也監訳 (1996) 「社会的状況とパーソナリティ」北大路書房.
- Mishel, W. (1968) *Personality and Assessment*. New York, Wiley.
- 詫摩武俊監訳 (1992) 「パーソナリティの理論～状況主義的アプローチ」誠信書房.
- 渡邊芳之 (1997) メタファーとしての「ここ

- ろ」～心的概念が意味しているもの 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 4; 75-82.
- 渡邊芳之・佐藤達哉 (1994a) 一貫性論争をめぐる行動観察と予測の問題 性格心理学研究, 2; 1, 68-81.
- 渡邊芳之・佐藤達哉 (1994b) パーソナリティの一貫性をめぐる「視点」と「時間」の問題 心理学評論, 36; 2, 226-243.
- 渡邊芳之・佐藤達哉 (1997) 性格は変わる, 変えられる～性格変容と多面性格の心理学 自由国民社.